序 説話文学と歴史史料の間に

倉本一宏

説話っていったい何なんだろう、という疑問は、古典文学というものに触れ始めた中学生の頃から、頭の中から離れることはなかった。まあ、中高生としては、『源氏物語』なんかに比べれば内容も簡単だし、一話で完結しているのだから、与し易い得意のジャンルであったことは確かである。

しかしながら、何故にこのような作品が生まれたのであろう、作者の意図は奈辺にあるのだろうかという根本的な疑問は、大学に入ってからでも、解決されることはなかった。大学院に進学してからは、『古事談』には『小右記』などの古記録を原史料として成立した説話もあることを知るに及び、ますます説話について、わけがわからなくなってきた。

その一方では、説話や「歴史物語」を何の史料批判もなしに歴史史料として用いた平安朝の論考が跋扈しているというのをもまた、学界の現状であった。私自身は、「古記録を用いるのはプロの歴史学者、歴史物語のような文学を読むのはアマチュア」という土田直鎮師の訓戒を受け、ひたすら古記録の解読に力を注ぎ続けてきたのであるが、やはり説話のことは気にかかっていたのであった（「歴史物語」については、なるべく関わらないようにしてきた）。

国際日本文化研究センター（日文研）に就職して共同研究なるものを主宰しなければならぬ立場に立ったとき、

まずは日記(古記録+仮名日記)を総合した共同研究会を立ち上げたのは、自然な流れであったとはいいい条、その次の共同研究会のテーマを何にしようかと悩んだ末、説話、しかも歴史史料としてのアプローチと文学としてのアプローチの両サイドから、同じ作品に取り組もうと決意したのは、かなり勇気のいる決断であった。

その直前に朝日新聞に載った上野千鶴子さんのエッセイに、人間は五〇歳を過ぎると自分の過去の業績をなぞるだけになる、それを回避するには未知の分野に踏み込むほかにないというのがあって、自分も積年の懸案に取り組もうと思いついた次第である。

いったいに説話文学というのは、どのようにして形成されたのであろうか。内容がまったくの創作でない限り、何らかの出来事が起こって、それが口承(記憶と伝承)もしくは文字史料(記録)によって留められ、それがいくたびかの変遷を経て、説話集に編修されたものであろうが、その具体的な経緯は、杳として謎に包まれたままである。

というわけで、日本史学や日本文学や考古学、宗教学、文化史学の研究者を集めて、説話という素材をそれぞれの立場で分析し、この文学ジャンルを解明しようというのが、本研究会の趣旨である。初期の研究計画は、以下のようなものであった。

文学作品としての「説話集」に収められた説話、および「説話的」なる素材と、歴史史料との関連を追究する。「説話集」そのものと歴史史料との関係を考察する他に、個々の説話(および「説話的」な素材)と、それに関連する歴史史料の条文との比較を念頭に置いて、研究を進める。

およそ日本における説話文学は、「説話」という語の本来の意味である口承文芸ではなく、特定の原史料を持つ書承文学であった。つまり、何らかの書物から話を選んで、それを書き写したものを集積したものが、「説話集」と呼ばれる作品なのである。なお、「説話」という文学ジャンルも、近代国文学史上の用語である。

説話を書写する際には、それを潤色したり、加筆したり、書き替えたりすることも行なわれたが、同系統の説話は、元は一つの原史料から様々に派生したものである可能性が高い。口承文芸とは異なり、説話を書写する者は貴族層であることが多いので、古記録類を参照する機会も多かったであろう。

その結果、「説話集」はあたかも確実な史実を記録した歴史史料を原史料としたものばかりであるという認識も存在する。特定の説話を無批判に自己の歴史叙述に引用する論考が多いのも、こういった事情によるものであろう。

しかしながら、個々の説話（および「説話的」な素材）と歴史史料との関係は、個々に考察する必要のある問題である。ましてや、「説話集」全体と歴史史料との関係は、軽々に論じられるものではない。

ところが、そのような検証作業を独力で行なうことは不可能である。「説話集」の研究を専門に行なっている国文学者、また「説話集」の作られた時代の歴史を研究している歴史学者、さらには個々の説話（および「説話的」な素材）で語られている時代を研究している歴史学者の英知を結集してこそ、このような学際的・総合的な英知の営みが可能となってくるのである。

また、外国における説話の存在形態や歴史性、さらには外国における日本説話研究を取り入れてこそ、真に国際的な研究を集積できるということは、いうまでもない。

本研究会においては、それぞれの分野における第一人者と称される研究者、第一線で活躍している研究者、近い将来にこの分野の中心となるであろう研究者、そして外国在住の研究者を一堂に会し、かかる視点による研究発表を積み重ね、議論を繰り返していくことによって、説話と歴史史料という困難な課題に取り組むたいと考えている。

その成果は、研究会終了後の論集によって世に問うつもりである。また、国際的な問題意識に基づく研究集

会を開催することも視野に入れている。

しかしながら、現在の学界においては考え得る最高のメンバーを集め、さらにものすごい大家をゲストスピーカーとして招いて四年間の研究会を積み重ねてきた、つまり歴史学と文学の両方をフュージョンした集団としては史上最高の研究会であったことは確実なのであるが、それでもなお、私にとって説話とは何であったのかという疑問は、相変わらずほとんど解明されていない。

説話とは解明不可能なもののだということがわかったということが成果であるならば、事は簡単なのであるが、そう言ってしまうのは元も子もなくなる。いやはや、学問というものは行き着く先がなく、前途は茫洋として寄る辺ないのである。

このままでは、次の研究会は何をテーマとして開けばいいのであろうか。「歴史物語」でないことは確かであるとして、これからも歴史と文学、そして日本と関わり続けて生きていくしかないのである。

序 説話文学と歴史史料の間に

第一部 説話と歴史史料

歴史叙述としての説話……………	小峯和明	3
文学の側から読んだ公家日記——『明月記』の月……………	池上洵一	24
『弘安源氏論義』をめぐる故実と物語……………	前田雅之	39
京洛の境界線——文学・古記録における平安京の内外認識……………	龔 婷	62
高麗文宗が求めた医師……………	榎本 涉	69

第二部 説話の生成

「コノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン」考——『小右記』と説話との間に……………	倉本一宏	77
---------------------------------------	------	----

古今著聞集と文体——漢字文の混入と諸相……………	野本東生	111
紅梅殿の壺と編纂——説話集を中心として……………	藤本孝一	130
源隆国の才と説話集作者の資質をめぐる検証——研究史再考をかねて……………	荒木浩	142
『宇治拾遺物語』の吉野地震伝承——大己貴命にさかのぼる……………	保立道久	162
◀和歌説話◀ 覚書……………	中村康夫	167
足利安王・春王の日光山逃避伝説の生成過程……………	呉座勇一	172
新しい世界の神話——中世の始まり……………	古橋信孝	179

特集 説話の国際性

日本とベトナムの十二支の違い……………	グエン・ヴー・クイン・ニュー	187
丁部領王の説話とベトナムのホアルー祭……………	ゴ・フォン・ラン	191
『二国遺事』と『日本靈異記』の観音説話について……………	宋 浣範	198
ベトナムの『禪苑集英』における夢について……………	グエン・テイ・オワイン	204
占城王妃の叙述をめぐる……………	佐野愛子	210
——『越旬幽霊集録』および『天越史記全書』から……………		

第三部 内在する歴史意識

称徳天皇と道鏡——『古事談』卷一卷頭話考……………	葛尾和宏	219
『長谷寺験記』編纂と下卷三十話の役割……………	内田 滯子	237
『拾遺往生伝』の歴史意識と文学意識……………	川上知里	260
中世における説話集編者の歴史認識——『古事談』と『古今著聞集』……………	松 蘭 齐	281
「宝剣説話」を耕す——公武合体論の深層……………	関 幸彦	305
戦国期の説話集『塵塚物語』……………	五味文彦	323
歴史文学と多重所屬者——慈光寺本『承久記』における三浦胤義について……………	樋口大祐	339
変貌する新田氏表象……………	谷口雄太	346
——「足利庶流」〔足利一門〕と「源家嫡流」〔非足利一門〕の間に……………		

第四部 説話の変容

日記と説話文学——円融院大井川御幸の場合……………	伊東玉美	353
武内宿禰伝承の展開——武内宿禰神格化の様相を中心に……………	追塩千尋	371

『発心集』蓮華城入水説話をめぐって……………	木下華子	389
ヤマトタケル研究の新しい可能性……………	井上章一	411
——同性愛と性別越境の比較をめぐって……………		
『夷堅志』のシラミと『古今著聞集』のシラミ……………	渡辺精一	416
新しく作られる歴史と神話……………	魯成煥	420

研究会の記録

説話・史料名索引

執筆者紹介

《二〇一五年度》

◆第一回 於・国際日本文化研究センター

五月十六日(土)

打ち合わせ

五月十七日(日)

倉本一宏「説話文学と歴史史料の間に——花山院説話をめ

ぐって」

荒木 浩「物語・談・著聞集——説話集の語りと史料性」

◆第二回 於・国際日本文化研究センター

七月四日(土)

古橋信孝「文学史における中世の始まり」

保立道久「天孫降臨神話と火山」

三舟隆之「『日本靈異記』と関連史料——史料性の方法論」

尾崎 勇「『治承物語』の今様をうたう徳大寺実定の意

味」

七月五日(日)

大橋直義「伝記への執心——『扶桑略記』のある側面につ

いて」

横田隆志「通天の帯の献上説話——『今昔物語集』巻二十

六第12話をめぐって」

上野勝之「仏教説話とその素材」

井上章一「聖徳太子とネストリアン」

◆第三回 於・東京大学文学部

八月二十九日(土)

小峯和明「東アジアの説話世界——第三極の説話・話芸論

へ」

伊東玉美「日記と説話文学——円融院大井川御幸の場合」

錦 仁「和歌の名所(歌枕)という説話」
モロカサリ

マヤ・ケリアン「History of Post-World War II Consumption:

Japan and Bulgaria」

八月三十日(日)

谷口雄太「中世における吉良氏と高氏——室町期南九州史

料に見える伝承と史実」

加藤謙吉「山背秦氏の祖先伝承——秦公酒と秦大津父」

渡辺精一「『夷堅志』の示唆するもの―『古今著聞集』・『徒然草』・花咲かしじい」

◆第四回 於・国際日本文化研究センター

十月十七日(土)

曾根正人「平安初期仏教と五台山―『日本霊異記』上巻

第五縁の五台山記事が持つ意味」

関 幸彦「説話三題―歴史学との回路をさぐる」

魯 成煥「越境する(日本神話)―韓国における高天原―

藤本孝一「中世絵巻の鑑賞方法―信貴山縁起絵巻を中心

に」

十月十八日(日)

葛尾和宏「『古事談』巻五巻頭話覽書」

多田伊織「古代仏教はだれのためのものか―言語から見

る『日本霊異記』

山下克明「式神と陰陽師説話をめぐって」

五月女肇志「『古今著聞集』と古記録」

◆第五回 於・国際日本文化研究センター

一月九日(土)

榎本 渉「文書・日記・説話における高麗文宗請医事件」

野本東生「『古今著聞集』と文体」

佐藤 信「『出雲国風土記』の説話世界」

野上潤一「林羅山『本朝神社考』による説話の資料化とその享受について―羅山の学問と近世前期学問史における一展開をめぐって」

一月十日(日)

内田濤子「『長谷寺験記』享受の一端」

グエン・ヴー・クイン・ニュー「ベトナムの昔話に見られるモチーフ(今昔物語を対象として)」

樋口大祐「慈光寺本『承久記』の視点について」

前田雅之「今昔物語集の享受から説話と歴史の関係を論

ずる―本朝通鑑・近代国学・国文学・芥川龍之介」

◆第六回 於・国際日本文化研究センター

三月五日(土)

呉座勇一「北条義時追討院宣は実在したのか―慈光寺本

『承久記』の再検討」

松蘭 齊「藤原(九条)道家と説話世界―『古今著聞集』

と『比良山古人霊託』をめぐって」

加藤友康「古事談における古記録の抄録―貴族たちが共

有した「世界」

佐野愛子「『粵^{えつてん}幽霊集録』の編纂をめぐって」

三月六日(日)

木下華子「『発心集』蓮華城入水説話をめぐって」

中町美香子「『今昔物語集』巻第二十七第九話の史実性

をめぐって」

追塩千尋「老演(803~867)の寺院創建伝承をめぐって」

中村康夫「和歌と歴史―和歌説話とは何か」

《二〇一六年度》

◆第一回 於・国際日本文化研究センター

六月四日(土)

追塩千尋「武内宿禰伝承の展開―『古今著聞集』武内宿

禰説話の意義とその背景」

古橋信孝「大和物語における歴史と文学」

六月五日(日)

井上章一「『百合若大臣』をめぐって」

◆第二回 於・国際日本文化研究センター

七月九日(土)

三舟隆之「『東大寺諷誦文稿』・『日本靈異記』・『日本感

靈録』の成立とその性格」

多田伊織「言葉と信仰―『日本靈異記』周辺の言語環

境」

七月十日(日)

巽 婷「京洛の境界線―文学・古記録における平安京

の「内と外」の認識変化について」

倉本一宏「『コノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン』考―
『小右記』と説話との間に」

◆第三回 於・国際日本文化研究センター

九月十日(土)

東 真江「説話と考古学―雲陽誌を中心に」

仁藤敦史「『日本靈異記』にみる他界観―黄泉の国から

地獄への転換」

九月十一日(日)

加藤友康「古事談の情報源―古記録が筆録した情報と

『言談』への変容の検討を通して考える」

グエン・テイ・オワイン「ベトナムの漢文説話における

高僧について―『禪苑集英』を中心に」

◆第四回 於・国際日本文化研究センター

十二月十日(土)

尾崎 勇「源頼朝の旗揚げをめぐる説話の側面―『愚管

抄』と『平家物語』とのあいだ」

五味文彦「説話と日記のはざま」

十二月十一日(日)

葛尾和宏「『古事談』巻一巻頭話考」

野本東生「『古今著聞集』「哀傷」考―実録意識を支える

もの」

《二〇一七年度》

◆ 第一回 於・国際日本文化研究センター

七月八日(土)

鈴木貞美「『説話』概念・文学・歴史・文化史」

松蘭 齊「中世における説話集作者の歴史意識について」

て」

内田滯子「『仮名貞観政要』の周辺から」

関 幸彦「武家・宝剣説話の諸相」

曾根正人「アジア仏教における因果応報教説と説話―因

果応報教説の占める教義的位置と教義テキストとし

ての説話の意義」

◆ 第二回 於・国際日本文化研究センター

九月九日(土)

上野勝之「霊験的事実の記録とその伝承」

佐野愛子「占城王妃祭祀考」

池上洵一「文学の側から読んだ公家日記」

野上潤一「林羅山『本朝神社考』による説話の資料化と

その享受について―羅山の学問と近世前期学問史に

おける一展開をめぐって」

藤本孝一「紅梅殿の壺と編纂―説話集を中心として」

◆ 第三回 於・国立公文書館、明治大学

十二月九日(土)

国立公文書館見学(古記録・説話の閲覧・撮影)

樋口大祐「転生する『太平記』―『近世太平記』を中心

に」

保立道久「大安寺・石清水と早良親王―河陽離宮から生

まれたもの」

前田雅之「古典的公共圏の成立期としての後嵯峨院時代

の役割と意味」

山下克明「平安後期の宿曜道と属星秘法伝承」

川上知里「『拾遺往生伝』の史実性と文学性」

◆ 第四回 於・国際日本文化研究センター

二月十日(土)

木下華子「『発心集』巻七―二「心戒上人不留跡事」

について」

五月女肇志「『百人一首』と説話」

大橋直義「花山院と那智・西国巡礼」

ゴ・フォン・ラン「丁部領王の説話とホアールー祭」

《二〇一八年度》

◆ 第一回 於・国立国会図書館、明治大学

七月七日(土)

石川久美子「みやび」の伝播伝承」

白雲飛「不思議な「鶴」の話―中国の歴史書・民間伝説から『今昔』へ」

グエン・ヴー・クイン・ニュー「日本の五節句とそのベトナムの伝説」

久葉智代「万葉集にみる「みやこ」と「ひな」への意識」

小峯和明「再び…第三極の説話・話芸論へ―(説話本)の提唱」

◆第二回 於・国際日本文化研究センター

十月二十日(土)

榎本 渉「高麗僧了然法明来日説の生成過程について」

谷口雄太「甲斐武田氏の対足利氏観」

中町美香子「『今昔物語集』の平安京と「上わたり」「下わたり」」

荒木 浩「『安養集』と源隆国の世界観再考」

呉座勇一「足利安王・春王の日光山逃避伝説の生成過程」

ろ		わ	
弄花抄	54	和漢兼作集	148
六波羅蜜寺縁起	277, 278	和漢朗詠集	31, 270
陸々集	137	和名類聚抄	222

方丈記	323
宝物集	282, 294, 383, 385
北山抄	140
法華經	144
補史記	126
法華驗記 (大日本国法華驗記、本朝法華 驗記)	144, 222, 263, 267, 270~274
発心集	143, 389, 390, 405
保暦間記	306, 310, 311, 314~316, 346
本寺堂院記	344
本朝新修往生伝	260
本朝神仙伝	380, 381
本朝世紀	240
本朝無題詩	271
本朝文粹	29, 132, 271, 328
本朝麗藻	270

ま

枕草子	29, 30, 323
増鏡	306, 346
万葉緯	379
万葉集	4, 379

み

水鏡	220, 221, 223~225, 233, 234
御堂関白記	94~96, 107, 120, 121, 138, 140
宮古島旧記	19
妙法寺記	17
岷江入楚	54

む

無名抄	405
-----	-----

め

明月記	24, 137, 138, 140, 240, 242, 323, 332
明月記歌道事	332
明德記	347
明文抄	229

も

孟津抄	54
師光朝臣記	55
文選	29

や

八雲御抄	357
山科家礼記	348
野馬台詩	9, 15, 16
大和西大寺最勝会縁起	242

ゆ

結城戰場記	174, 176
結城戰場別記	175, 176
有職抄	108

よ

容齋隨筆	416
義氏様御代之中御書案之書留	346
吉野拾遺	329

ら

洛陽田楽記	222
-------	-----

り

李部王記	328
略記	233, 234
琉球国旧記	20~22
琉球国由来記	19~21
令義解	227
林逸抄	54

る

類聚国史	130
類聚三代格	67
類聚史譜	328

れ

嶺南摭怪	188, 204
列子	416

塵塚物語	323
つ	
経任大納言記	148
徒然草	281, 283, 284, 323, 329, 337, 418
て	
帝王編年記	225
貞丈雑記	349
天台座主記	268
天台南山無動寺建立和尚伝	263, 278
殿曆	148, 363, 366
と	
東寺執行日記	173
東大寺縁起	162
東宝記	254
童蒙頌韻	261
唐六典	62
俊頼髓脳	108, 170
な	
仲行記	55
南翁夢録	205
に	
二条殿御記	55
日光山往古年中行事帳	173
日光山常行三昧新造大過去帳	173
入唐求法巡礼行記	10, 11
日本往生極楽記	144, 206, 260, 261, 269
日本紀竟宴和歌	376
日本紀略	64, 95, 96, 101, 102, 220, 221, 267, 357, 367, 390, 400
日本後記	328
日本高僧伝要文抄	275
日本国現報善悪霊異記	144
日本三代実録	13, 14, 66, 96, 131, 263, 265, 266, 268, 271, 377
日本書紀	131, 164, 166, 187, 226, 372~375, 377, 378, 381, 411~414, 423, 424
日本文徳天皇実録	96, 328

日本霊異記	198, 208, 263, 323
仁和寺御日次記	340
仁和寺諸院家記	344
の	
能恵法師絵詞	383
は	
白氏文集	58
長谷寺縁起文	237, 238, 249
長谷寺験記	237
長谷寺造立供養次第	252
長谷寺密奏記	237, 239
八幡宮寺巡拝記	381
播磨国風土記	180
万水一露	54
伴大納言絵巻	12~14
ひ	
光源氏物語抄	39, 41, 54
百練抄	84, 88, 240, 246, 380, 393, 395
平戸記	375, 376, 378
琵琶行	54, 58, 59
ふ	
袋草紙	138, 170, 171
富家語	51, 53, 55, 287, 291
豊山前史	247
扶桑略記	222, 223, 275, 276, 287
風土記	19
文華秀麗集	270
文机談	295
へ	
平家物語	4, 6, 11, 15, 28, 70, 306, 308~310, 316, 317, 339
平治物語	339
別尊雑記	141
別尊要記	141
ほ	
保元物語	224, 339

除目次第	155
除目抄	155
沙石集	143, 283
拾遺往生伝	260
拾遺愚草	332
春記	157, 158
小記目録	82, 84, 94, 104, 293
承久記	306, 339
掌中歴	261
聖徳太子未来記	15
浄土論	260
紹巴抄	54
浄弁・慶雲等詠歌短冊	133
将門記	4
小右記	64, 66, 67, 72, 77, 80, 97, 107, 124, 138, 139, 153, 154, 157, 287, 288, 290~294, 354, 355, 357~360
続古今和歌集	152
続日本紀	226~229, 234, 373
続日本後紀	263, 265, 267, 379
諸雑記	132, 133
諸山縁起	163
諸寺縁起集	270
新古今和歌集	152, 328, 399
晋書	54, 58
新撰菟玖波集	337
新撰朗詠集	270
信長公記	4
新勅撰和歌集	29, 136
神皇正統記	306, 317, 346, 355, 357, 358

す

水原抄	54
水左記	69, 73

せ

政事要略	132
関寺縁起	93
禅苑集英	204, 205
善家秘記	222
千載和歌集	44, 152
先代旧事本紀	166

川柳万句合	411
-------	-----

そ

宋高僧伝	208
僧綱補任	225, 231, 267, 268
宋史	375
雑談集	283
曾我物語	317, 341
続古事談	69, 70, 84~87, 108, 117, 138, 139, 353, 365, 368, 369
続千字文	261
続本朝往生伝	260, 269
帥記	69, 72
尊卑分脈	268, 364

た

大越史記	210
大越史記全書	188, 191, 193, 195, 210, 212
大越史記続編	210
台記	115, 116, 287, 288, 290, 294
體源鈔	146, 147
大同類聚方	384
大日本国法華驗記	206, 263
太平記	4, 14, 131, 311, 312, 317, 329, 346~349
大法師浄藏伝	275~277
内裏儀式	140
旦那名字注文	346

ち

親信卿記	138
治瘡記	385
池亭記	65, 66
中外抄	53, 287, 291
中山世鑑	19, 20
中山世譜	20
中右記	27, 56, 124, 153, 154, 366
中右記部類紙背漢詩集	148
朝覲行幸部類	86, 87, 359, 360
長秋記	26, 376
朝野群載	70, 71, 158, 261, 367

九曆	124
行基菩薩等御歌	134
教訓抄	356
玉葉	227, 289
玉葉	28, 83, 96, 354, 355, 357, 358, 360 , 365, 403
玉葉和歌集	152
御遊抄	86, 87, 359, 360
金葉集	399
禁裏御藏書目録	250
<	
宮寺縁事抄	379~381, 383, 384
空也誄	277, 278
愚管抄	51, 144, 158, 306~308, 317, 367
公卿補任	52, 53, 56, 268, 288, 364
旧唐書	62
け	
元亨釈書	225
源氏物語	
4, 39~44, 47, 48, 52, 56, 59, 60, 328	
原中最秘抄	54, 57
源平盛衰記	308, 313, 315, 317
建保度長谷寺再建記録	252, 253
見聞諸家紋	346, 348
こ	
弘安源氏論義	39, 44, 48
弘安三年長谷寺建立秘記	254
江家次第	140
興正菩薩行実年譜	242, 243
光台院御室伝	340
皇代記	55
後宇多天皇実録	254
江談抄	11, 13, 70, 88, 97, 105, 106, 111, 127, 156, 224, 285, 287
興福寺三綱補任	267
興福寺別当次第	267
公武大体略記	346
高麗史	201
古今和歌集	39, 41, 44, 45, 112

湖月抄	54, 60
古今著聞集	11, 41, 44, 70, 89, 90, 111 , 112 , 140, 156, 281, 285, 286 , 323, 337, 371~373, 378, 386, 416
古事記	4, 164~166, 187, 372, 373, 377, 381, 411~414, 424
古事談	79, 83, 90, 93, 95, 98, 108, 157, 219, 281, 286, 353 , 364, 365, 367, 384
後拾遺往生伝	260, 263
後拾遺和歌集	149, 152
狐媚記	222
後伏見天皇宸翰御願文	247
古本説話集	78
権記	24, 94, 95, 107
今昔物語集	4, 6, 11, 13, 14, 63, 66, 67, 81, 82, 93, 94, 96, 98, 107, 149, 151, 168, 169, 170 , 171, 179, 180, 182, 206, 208, 222, 261, 263, 323
さ	
西宮記	155
最勝会縁起	247
細流抄	42, 54, 56, 57
左経記	67, 92
里見家永正元亀中書札留拔書	346
実隆公記	250, 324
三外往生伝	260
三議一統大双紙	346
三国遺事	198
三国志演義	415
三条西家重書古文書	89, 91, 101
参天台五台山記	158
三宝絵	144, 206
し	
史記	229
資治通鑑	43
私聚百因縁集	206
七大寺巡礼私記	78
七大寺年表	224
十訓抄	11, 41, 70, 118, 140, 374
紫明抄	39, 43, 54

説話・史料名索引

*採録語句が章・節・項のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にし、その章・節・項内からは採録を省略した。

あ			
顕広王記	390, 393~395, 403, 404	応仁記	324
阿婆縛抄	141	王年代紀	375
吾妻鏡	306, 310, 329, 341, 342, 344, 371	大鏡	51, 52, 99, 100, 103~107
安養集	143, 144, 158, 159	大館記	346
い		大館持房行状	347
夷堅志	416	男山考古録	379
伊勢物語	39, 57, 328, 330	御室相承記	240
一代要記	367	か	
因幡国風土記	379	河海抄	42, 43, 54, 56, 57
猪隈閑白記	227	覚禅抄	141, 224
今鏡	119	花鳥余情	42, 54, 56, 57
妹背山女庭訓	164	楽記	356~358
遺老説伝	18, 21, 22	仮名手本忠臣蔵	4
う		鎌倉大草紙	175
宇治拾遺物語	12~14, 142, 143, 162 , 401, 403	鎌倉殿物語	176
宇治大納言物語	14, 108, 111, 127, 142 , 159, 285	鎌倉持氏記	174~176
うつほ物語	52	菅家集	132
え		菅家文章	132
叡岳要記	277	関東合戦記	176
栄花物語	11, 93, 101, 102, 145 , 149~153	関東幕注文	348
永享記	172, 174, 176	寛平御遺誠	115, 116, 121
叡山大師伝	263, 270, 272, 278	看聞日記	250
粵甸幽霊集	205	き	
越甸幽霊集録	210, 211	祈雨日記	94
延喜式	62~64, 226, 379	北野天神縁起	4
		貴嶺問答	409
		吉備大臣入唐絵巻	7~9, 11, 16
		休閒抄	54
		球陽	21, 22
		鳩嶺集	148

谷口 雄太 (たにぐち ゆうた)

1984年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学。博士(文学)。東京大学大学院人文社会系研究科研究員。

「足利一門再考」(『史学雑誌』122-12, 2013年), 「中世後期武家の対足利一門観」(『日本歴史』829, 2017年), 「足利時代における血統秩序と貴種権威」(『歴史学研究』963, 2017年)。

伊東 玉美 (いとう たまみ)

1961年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。博士(文学)。白百合女子大学文学部教授。

『新注古事談』(浅見和彦と共に責任編集, 笠間書院, 2010年), 『新版発心集 上・下 現代語訳付き』(浅見和彦と共訳注, KADOKAWA, 2014年), 『ビギナズ・クラシックス 日本の古典 宇治拾遺物語』(編, KADOKAWA, 2017年)。

追塩 千尋 (おいしお ちひろ)

1949年生。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。北海学園大学人文学部教授。

『中世南都の僧侶と寺院』(吉川弘文館, 2006年), 『中世南都仏教の展開』(吉川弘文館, 2011年), 『中世説話の宗教世界』(和泉書院, 2013年)。

木下 華子 (きのした はなこ)

1975年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。ノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科准教授。

『鴨長明研究——表現の基層へ』(勉誠出版, 2015年), 「『源家長日記』の方法と始発期の後鳥羽院像」(『国語と国文学』93-4号, 2016年4月), 「道程を叙述する文体——『山家集』中国・四国関係歌群と『無名抄』から」(『西行学』8号, 2017年8月)。

井上 章一 (いのうえ しょういち)

1955年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。工学修士。国際日本文化研究センター教授。

『日本に古代はあったのか』(角川学芸出版, 2008年), 『伊勢神宮と日本美』(講談社, 2013年), 『学問をしるもの』(編著, 思文閣出版, 2017年)。

渡辺 精一 (わたなべ せいいち)

1953年生。國學院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。

『素書』(明德出版社, 1987年), 『三国志人物事典』(講談社, 1989年), 『ビジュアル版 史記物語』(講談社, 2001年)。

魯 成煥 (ノ ソンファン)

1955年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。韓国蔚山大学日文学科教授。

『古事記』(ソウル, 民俗苑, 2009年), 『日本神話と古代韓国』(ソウル, 民俗苑, 2010年), 『日本神話の中の新羅人伝承』(ソウル, 民俗苑, 2014年)。

葛尾 和宏（つたお かずひろ）

1972年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。専修大学文学部教授。
『院政期説話文学研究』（若草書房、2015年）。

内田 滯子（うちだ みおこ）

1964年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士課程修了。博士（文学）。お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所研究協力員。

『「十訓抄」序文再読』（『日本文学』709号、2012年）、「縁起の〈縁起〉—『長谷寺縁起文』成立周辺」（『論集 中世・近世説話と説話集』和泉書院、2014年）、「一生涯草紙系『西行物語』考」（『国語と国文学』95巻11号、2018年）。

川上 知里（かわかみ ちさと）

1986年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。博士（文学）。尚絅大学文化言語学部助教。

『「今昔物語集」非仏法部の形成—巻十「震旦付国史」を中心に』（『国語と国文学』91-4、2014年）、
『「今昔物語集」巻三十「本朝付雑事」論—仏教と恋との狭間』（『東京大学国文学論集』10、2015年）、
『「打聞集」論』（『国語と国文学』94-6、2017年）。

松 蘭 齊（まつぞの ひとし）

1958年生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程満期終了退学。博士（文学）。愛知学院大学文学部教授。

『日記の家—中世国家の記録組織』（吉川弘文館、1997年）、『王朝日記論』（法政大学出版社、2006年）、
『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、2018年）。

関 幸彦（せき ゆきひこ）

1952年生。学習院大学大学院人文科学研究科博士課程修了。日本大学文理学部教授。

『百人一首の歴史学』（NHK出版、2009年）、『その後の東国武士団』（吉川弘文館、2011年）、『承久の乱と後鳥羽院』（『敗者の日本史』シリーズ、吉川弘文館、2012年）。

五味 文彦（ごみ ふみひこ）

1946年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。博士（文学）。東京大学名誉教授。

『院政期社会の研究』（山川出版社、1984年）、『書物の中世史』（みすず書房、2003年）、『文学で読む日本の歴史』（山川出版社、2017年）。

樋口 大祐（ひぐち だいすけ）

1968年生。東京大学文学部人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。神戸大学大学院人文学部研究科教授。

『乱世のエキリチュール—転形期の人と文化』（森話社、2009年）、『変貌する清盛—『平家物語』を書きかえる』（吉川弘文館、2011年）、「一八七四年の「台湾危機」—回避した戦争をめぐる諸言説について」（井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版、2016年）。

NGUYEN VU QUYNH NHU (グエン・ヴァー・クイン・ニュー)

1969年生。ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学文学学部博士修了。ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学日本学部講師。国際日本文化研究センター外来研究員。

『古くて新しいもの——ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る』(口述, 国際日本文化研究センター, 2017年), 「ベトナム人と俳句」(『跨境 日本語学研究』2018年), 「*Thơ haiku thời kỳ toàn cầu hóa* (グローバル時代における俳句)」(『越日関係45年の成果と展望』ベトナムアカデミー, 東北アジア研究, 2018年)。

NGO HUONG LAN (ゴ・フォン・ラン)

1973年生。ベトナム社会科学アカデミー附属社会科学学院言語学部比較言語学研究所博士後期課程修了。博士(言語学)。ベトナム社会科学アカデミー附属東北アジア研究所日本研究センター副所長・重要研究員。

『レジリエンス社会構築・ベトナムと日本との協力』(ハノイ国家大学出版社, 2018年), 「日本と韓国における社会関係資本」(『東北アジア研究雑誌』213号, 2018年11月), 「祭礼—コミュニティの歴史や文化空間を再現する場: ベトナムのホア・ルー祭と日本の祇園祭を中心に」(『東北アジア研究雑誌』214号, 2018年12月)。

宋 浣 範 (ソン ワンボム)

1965年生。東京大学大学院人文社会研究科博士後期課程修了。博士(文学)。韓国高麗大学GLOBAL日本研究院教授。

「融・複合的日本学としての“歴史地震学”——“災難学”についての提言」(『日本学報』100号, 2014年), 「東アジア安全共同体論」序説(学習院女子大学国際学研究所叢書『調和的秩序形成の課題』御茶の水書房, 2016年), 「7世紀における倭国の外征や内戦の‘戦後処理’と日本の誕生」(『日本思想』33号, 2017年)。

NGUYEN THI OANH (グエン・ティ・オワイン)

1956年生。ハノイ師範大学大学院博士課程修了。博士(文学)。ハノイ・タンロン大学外国語部日本語部門准教授。

「ベトナムの漢文説話における鬼神について——『今昔物語集』と『搜神記』との比較」(小峯和明編『東アジアの今昔物語集——翻訳・変成・予言』勉誠出版, 2012年), 「ベトナムと日本における法華経信仰——古典から探る」(浅田徹編『日本化する法華経』勉誠出版, 2016年), 「ベトナムの漢文説話における「夢」とその資料」(荒木浩編『夢と表象——眠りとこころの比較文化史』勉誠出版, 2017年)。

佐野 愛子 (さの あいこ)

1987年生。明治大学大学院文学研究科博士後期課程在学中。修士(文学)。明治大学大学院文学研究科博士後期課程院生。

「『禪苑集英』における禅学将来者の叙述法」(小峯和明監修『東アジアの文化圏』シリーズ日本文学の展望を拓く1, 笠間書院, 2017年), 「『粵甸幽霊集録』における神——モンゴルの侵略を通して」(『立教大学日本学研究所年報』13, 2015年)。

野本東生（のもと　とうせい）

1980年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。博士（文学）。北海道大学大学院文学研究科准教授。

『閑居反の結縁意識』（『東京大学国文学論集』6、2011年3月）、『十訓抄における叙述方法——類比的装い』（『国語と国文学』90-4、2013年4月）。

藤本孝一（ふじもと　こういち）

1945年生。法政大学大学院人文学科研究科博士課程修了。博士（文学）。龍谷大学文学部客員教授。

『中世史科学叢論』（思文閣出版、2008年）、『国宝『明月記』と藤原定家の世界』（臨川書店、2016年）、『定家本源氏物語　行幸・早蕨』（編、八木書店、2018年）。

荒木　浩（あらか　ひろし）

1959年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）。国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授。

『説話集の構想と意匠　今昔物語集の成立と前後』（勉誠出版、2012年）、『かくして『源氏物語』が誕生する——物語が流動する現場にどう立ち会うか』（笠間書院、2014年）、『徒然草への途——中世びとの心とことば』（勉誠出版、2016年）。

保立道久（ほたて　みちひさ）

1948年生。東京都立大学人文科学研究科修士課程修了。修士。東京大学名誉教授。

『歴史学をみつめ直す——封建制概念の放棄』（校倉書房、2004年）、『中世の国土高権と天皇・武家』（校倉書房、2015年）、『現代語訳　老子』（ちくま新書、2018年）。

中村康夫（なかむら　やすお）

1949年生。神戸大学大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。国文学研究資料館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授。

『袋草紙考証』歌学編／雑談編（和泉書院、1983／1991年）、『栄花物語の基層』（風間書房、2002年）、『皇位継承の記録と文学——『栄花物語』の謎を考える』（臨川書店、2017年）。

呉座勇一（ござ　ゆういち）

1980年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。国際日本文化研究センター助教。

『日本中世の領主一揆』（思文閣出版、2014年）、『応仁の乱』（中央公論新社、2016年）、『永享九年の「大乱」』（植田真平編著『足利持氏』戎光祥出版、2016年、初出2013年）。

古橋信孝（ふるはし　のぶよし）

1943年生。東京大学大学院人文科学研究科後期課程修了。博士（文学）。武蔵大学名誉教授。

『古代和歌の発生』（東京大学出版会、1983年）、『日本文学の流れ』（岩波書店、2010年）、『平安期日記文学総説——一人称の成立と展開』（臨川書店、2018年）。

執筆者紹介（収録順）

倉本一宏（くらもと かずひろ）

1958年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。博士（文学，東京大学）。国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授。

『日本古代国家成り立ちの政権構造』（吉川弘文館，1997年）。『撰閣政治と王朝貴族』（吉川弘文館，2000年）。『『御堂閔白記』の研究』（思文閣出版，2018年）。

小峯和明（こみね かずあき）

1947年生。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。立教大学名誉教授，中国人民大学
高級外国専門家。

『説話の森』（岩波現代文庫，2001年）。『中世日本の予言書』（岩波新書，2007年）。『遣唐使と外交神話』（集英社新書，2018年）。

池上洵一（いけがみ じゅんいち）

1937年生。東京大学大学院文学研究科博士課程単位修得中退。博士（文学）。神戸大学名誉教授。

『池上洵一著作集』全4巻（和泉書院，第1・2巻，2001年／第3・4巻，2008年）。

前田雅之（まえだ まさゆき）

1954年生。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。明星大学人文学部
日本文学学科教授。

『なぜ古典を勉強するのか』（図書出版文学通信，2018年）。『書物と権力』（吉川弘文館，2018年）。『画
期としての室町——政事・宗教・古典学』（編著，勉誠出版，2018年）。

龔 婷（きょう てい）

1987年生。奈良女子大学人間文化研究科博士前期課程修了。修士（文学）。総合研究大学院大学文化
科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程在学中。

榎本 渉（えのもと わたる）

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。博士（文学，東京大学）。国際
日本文化研究センター准教授・総合研究大学院大学准教授。

『東アジア海域と日中交流——9～14世紀』（吉川弘文館，2007年）。『僧侶と海商たちの東シナ海』（講
談社選書メチエ，2010年）。『南宋・元代日中渡航僧伝記集成 附 江戸時代における僧伝集積過程の
研究』（勉誠出版，2013年）。

倉本一宏→別掲

せつ わ けんきゅう ひら
説話研究を拓く——せつ わ ぶんがく れきし しりょう かいだ説話文学と歴史史料の間に

2019（平成31）年2月28日発行

編者 倉本一宏

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装幀 白沢 正

印刷
製本 西濃印刷株式会社

© K. Kuramoto 2019

ISBN978-4-7842-1967-4 C3093